TURN NOTE

TURNとともにあるときの言葉
2019

文化
オリンピアード

TOKYO 2020

TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES

文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo Tokyo
FESTIVAL

TURN NOTE

TURNとともにあるときの言葉
2019

本書は、「TURN」における以下の資料（2019年1月–12月）をもとに作成しています。
2019年12月31日現在の情報に基づきます。

TURN公式ウェブサイト 「タイムライン」	ウェブサイト上で公開している、TURNの活動日報 https://turn-project.com/timeline
文字起こしデータ	●TURNミーティング（第7回–第9回） TURNを共有し、意見交換する開かれた場。第7回は2月2日に東京都美術館、第8回は5月12日、第9回は11月17日に、ともに東京藝術大学にて開催 ●TURNフェス5 8月16–18日・20日、東京都美術館で開催。会期中に実施したトークやステージなどのプログラム
その他	●TURNフェス5サポーターとの共有メモ ●TURN関係者とのミーティングを記録したメモ ●TURN公式ウェブサイトでは公開されていない関係者メモや活動日報など

TURN NOTE

矢内純子
（TURNフェス5サポーター）

TURNフェス5 サポーターメモより
2019年8月17日

身を置いてみる

全部をわかろうとするのではなく、「まずそこに身を置いてみる」。これが自分自身の視野を広げ、気持ちをゆったりさせることを知りました。

ロバート キャンベル
（日本文学研究者／
国文学研究資料館長）

見えない膜のようなもの

第7回TURNミーティングより
2019年2月2日

僕は、男性であり白人であり、高い学歴を携えて日本に来ましたので、私はそれほど生きづらさというものを、個人として感じないです。ゲイだということはありますし、外国人であるということもあって、見えない機会、与えられなかったチャンスもあるかもしれませんけども、礫（つぶて）を投げられることはないんですね。だけれども、どこかで静かにやっぱり違和感であったり、人との間の壁であったり、見えない膜のようなものを折々に感じてきたことはあります。それをどういうふうにアートとか表現とか、そしてこのTURNのプロジェクトの中で乗り越えていくのか。あるいは、慣らしていくのか。

石川絵理
（NPO法人シアター・アクセシビリティ・
ネットワーク事務局長）

いろいろな方法

TURNフェス5「目が見えない人＆耳が聞こえない人と
みなさんがつくる共感ツアー」振り返りミーティングより
2019年9月25日

「伝わらない」ということを知ってもらう。伝えるためのいろいろな方法があり、制限がある中で努力しあって伝えることの楽しさを、このツアーを通して伝えたいと思いました。

島影圭佑
（OTON GLASS＼FabBiotope 社幸）

TURNフェス5 トーク「ケーススタディプレゼン」
（OTON GLASS＼FabBiotope）より
2019年8月16日

針穴に糸を通すような何か

馬場さん*が「針穴に糸を通すような解決策とかアイデアっていうのは、一定の普遍性を持つよね」って仰っていて。確かに「こんな課題があって、その自明な課題っていうのをこういうふうに解決すると確かに効率的だね」っていう話ではなくて、そんな世界の見方があるんだと驚きました。
既にある自明な課題を解決する何か、というよりも、既にそこにあるにも関わらずないことにされていた多様性があって、それを針穴に糸を通すような何かものが立ち現れた時に、「そんな多様性が実はあったんじゃん」っていうのがありのままにできる。

*馬場正尊：建築家、公共R不動産ディレクター。視覚障害を持つ。

白鳥建二
（全盲の美術鑑賞者）

TURNフェス5 ツアー
「会話によってみえてくる美術鑑賞会」より
2019年8月17日

目が見えるか見えないかは、そんなに大きな話じゃない

目が見えている人は、見たら全てわかるだろうって思われているかもしれないけれど、目が見えていても、見ようとしなければわからないことがあるのではないかなと。
見えない人からは、「無意識的に見えている人は、見えているんだからなんでもわかっていて、見えない自分の方がわからないことの方が多い」っていう無意識的な先入観があるんですよ。
でも、（今日みたいに）こういうふうに鑑賞すると「なんだ。見えていてもわかっていないじゃん」「見えているんだけど、見ているモノが全然違うじゃん」ということが度々あって。
実際には、目が見える、見えないっていうことで、差が大きいっていう場面もあるけど、こういう鑑賞をしていると目が見えるか見えないかは、そんなに大きい話じゃないんじゃないかなって。そういう気もしてくる。

マチーデフ
（ラッパー）
板橋区立小茂根福祉園
（障害者通所施設）

ヒヤリハットよりきらりグッと

TURNフェス5 ステージ「TURNラップのど自慢＊」（板橋区立小茂根福祉園の「ヒヤリハットよりきらりグッと」の歌詞）より
2019年8月18日

ある日私は落ち込んでた
一人部屋に閉じこもってた
すると利用者の松田さんが
現れ私にこう言い放った
「こんにちは、レディガガです」
その瞬間吹っ切れた
ヒヤリハットよりきらりグッと

＊TURNラップのど自慢：ラッパーのマチーデフが、交流先のメンバーやスタッフへヒアリングを行いオリジナルラップが誕生。それをメンバーやスタッフ自らステージで歌い上げた。

梶谷真司
（東京大学大学院総合文化研究科教授）

カテゴライズを消す

第8回TURNミーティングより
2019年5月12日

「哲学対話」では、自己紹介の仕方が変わっていて、例えば本名じゃなくてもいい。
「人参です」と言ってもいいんです。自分の身分も言わない。誰かが「銀行員です」と言った瞬間に、「この人は真面目な人なのかな」という先入観を持ってしまう。年齢も言わない。それに自己紹介で名前を言われても、どうせ覚えていられない。代わりに「好きな食べ物はなんですか」というような日常的な質問に答えてもらうんです。そうするとその人の人柄がわかって、それが自己紹介になる。名前は覚えられなくても、何が好きなのかは覚えていられます。これはある意味、カテゴライズを消す作業です。そうすれば、その人自身と対話ができるんです。

そうではない
コミュニケーション

ポーズを決めてくれるから、こっちはほぐれたりもするんですけど、今はどっちかっていうと、写真を撮ることでとっているコミュニケーションがちょっとずるいなとも思っていて。
高橋さん* も、「写真撮るよ」って言うと顔が変わっちゃうんですよね。
（中略）
カメラを向けることで答えてもらっているところが少なからずあるのですが、そうではないコミュニケーションが取りたいなって思っています。

川瀬一絵
（写真家）

TURNフェス5 アーティストトークより
2019年8月18日

*高橋正浩：障害福祉サービス事業所「リサイクル洗びんセンター」の利用者。

どれだけ他者や対話の相手を
混ぜていくか

つくるプロセスに、どれだけ他者や対話の相手を混ぜていくか、加わってもらえるようにするのかっていうのを今やりたいなって思っています。それが、いろんなプロジェクトでやりたいなって思っていることの一つですね。

安部良
（建築家）

第9回TURNミーティングより
2019年11月17日

富塚絵美
（アーティスト）

富塚によるSNS投稿より
2019年8月22日

共同で暇つぶしをする空間

盲ろう者たちとの交流は、視覚芸術や聴覚芸術の歴史を超えて、表現の自由や不自由の議論すらも忘れるほどで、表現することが持つややこしさ、難しさをひたすら痛感し、知覚が異なる生き方をしている仲間たちがともに時間を過ごすことだけでも奇跡的に感じました。安心できる環境、信頼できる関係を築くには表現し合うことが必要で、でも表現し合うにはみんなの勇気やリスクが伴うこと、大切なものを自覚した途端、沢山傷つくこと、を実感しました。
みんなで暇つぶしをするつもりが、感動したり、同じ夢を見たり、そうかと思えば傷つき、憎んだり、励ましたり、疲れて寝たり、時に警戒し、不安になり、助け合い…そんな複雑な平和な時を過ごしました。

百田牧人
（会社員）

TURNフェス5 トーク「当事者家族のあり方」
（OTON GLASS＼FabBiotope）より
2019年8月17日

普通に気づける

世の中がどうしても効率性を考えるがゆえに、障害者っていうカテゴリーをつくっちゃって、なかなか（身のまわりにいる障害を持った人たちに）気づかない状態になっている。だから、もっと普通に気づけるような環境にしていくことがとても大切なんじゃないかな。

赤荻徹
（アトリエ・エー代表）

先入観

TURNフェス5 トーク
「アートとサッカーとTURNの親和性」より
2019年8月16日

活動を始めた頃は、参加者にどういう障害があるのかを保護者から聞いて、スタッフに伝えるようにしていましたが、それが余計な先入観を持つことになると気づいて…。
今は初めての参加者が来ても、いきなり隣に座って話しかけ、一緒に絵を描くようになりました。それでも全然問題はなく、スタッフと参加者のお互い「はじめまして」の緊張感もまた面白くて…。

新澤克憲
（ハーモニー施設長）

ラインの両側

TURNフェス5 ゼミ3「じぶんをつくる」より
2019年8月17日

「ラブ・エロ・ピース」というバンドには8人のいろいろなメンバーがいるんですけども、その人たちがやろうよと誘ってくれたので、ギターを弾いています。
時には、車椅子を利用している彼らと、同じステージで差別反対を訴えていいんだろうかと自問自答する感覚がありました。自分は障害者手帳を持っている訳でもなく、健常者が何がわかるんだと言われかねない立場にもあります。リーダーの裕二さんの書いた歌詞に『ふつう』というのがあります。彼自身が「普通」っていうラインの両側にいて、自分のことを「ふつうにあこがれ」「ふつうをおいかけ」「ふつうにこびる俺」と表現している。「俺は差別するなと歌っているけれど、自分も差別しているかもしれない」「『普通』に憧れちゃうよ」っていうふうに言ってくれることによって、僕はすごくホッとしたというか、自分の居場所を見つけたというか。

「待つ」ということは一人で成り立たない

畑まりあ
（アーツカウンシル東京職員）

TURNフェス5 トーク
「身体で遊び、表情とオドル」より
2019年8月18日

「待つ」ということは一人で成り立つのではなく、他者を意識することで「待つ」ということがある。それはある空間の中がいろいろな人で構成されているよ、ということを考えることにもつながるのかなと。それは身体を通して他者と関係していくことだったり、一つ一つと向き合っていくことだったり、空間に誰がいるのかとか、社会そのものに誰がいるのを考えることにつながっていくのではと思いました。

きょうだい児っていう言葉

髙橋梨佳
（せんだいメディアテーク職員）

TURNフェス5 トーク「きょうだい児ー親でも友達でもない人たちがみる障害と社会と自分ー」より
2019年8月20日

「きょうだい児」という立場で初めて話をさせていただきますが、「きょうだい児」っていう言葉の括りには少し違和感を持っています。障害のある人を「障害児」、障害のある人を兄弟に持つ人を「きょうだい児」というふうに括ってしまうと、悩みを共有できても、そこで閉じちゃうのかなって危機感は感じていて。それを障害のあるなしに関わらず「兄弟」っていう枠組みに、広げていきたい。障害のない兄弟にも悩みや葛藤ってたくさんあるだろうし、フラットに共有していけたらいいなって思っています。

日比野克彦
（TURN監修者／アーティスト）

TURNフェス5「TURNとBIENALSUR
―人とみちの巡り会い―」より
2019年8月20日

アートの日常との近さ

アートは人の日常の中にある。アートの日常との近さ。この日本においては芸術というものが学問になったのは、明治時代に西洋のアートがその生まれた背景とは切り離されて美術品のモノとして入って来たことが大きな要因ではないかと思う。学問になったから芸術大学ができて、芸術を学ぶっていう姿勢になった。でも、もともとアートっていう美の認識っていうのは、人の日常の中にあった。生活する中で人が産み出してきた産物だからこそアート。

布下翔碁
（工芸作家）

TURN in TUCUMAN, BIENALSUR日報より
2019年5月29日

素材は国境を超えた言語

今日初めて会ったセルヒオとは言語でコミュニケーションがとれない。けれど、互いに粘土を触っていると自然と通じ合うことができる。素材は国境を超えた言語になると感じた。

松本力
（アーティスト）

タイムライン「みるをつくす」より
2019年3月13日

やむにやまれぬ思い

いつか、君はなにがしたいの？と問われ、「発言権が得たい」と、口をついてでた。あははと笑われたけれど、自分でも可笑しくて。驚いていた。有言実行、自分の活動をひらいていきたい。いきたいってことは、それがまだできていないということだよね。表現するって、なんだろう。すききらいではなく、もっと、やむにやまれぬ思いが、そこにはあるはずだ。おっかなびっくりでも、いままでのように、これからも、発言していこうとおもう。だれかがおもったことを、だれかもおもっていてくれるかもしれない。

塩瀬隆之
（京都大学総合博物館准教授）

TURNフェス5 トーク「IN-Accessibility―世の中の排除から考え実現させるアクセシビリティー」より
2019年8月16日

できなくさせられてしまった人

障害のある人をDisable Person（できない人）からDisabled Person（できなくさせられてしまった人）と言い換えることで、エンジニアやデザイナーができることが増えるという新しい視点に改めて気づかされた。

何が見えますか？

高橋若余
（TURNフェス5サポーター）

「途中で何が見えますか?」
「道中は楽しいですか、大変でしたか?」
…風がふいて気持ちがいい、という答えが
返ってきて驚きました。

TURNフェス5 サポーターメモより
2019年8月20日

ツアー参加者とのやり取り。アーティストの岩田とも子による、紙の微細なシワを「地図」に見立てるという企画において、手元にある紙を目にしながら、その風景を想像していた。

感覚へのアクセス

ライラ・カセム
（TURNプロジェクトデザイナー）

衣食住や教育の前に、もっと必要なアクセスがあるのではないかと思います。それは感覚へのアクセスです。
誰もが身体的な経験を通じて自分の中に秘めている感覚、感情を持っていますが、そうしたことにアクセスすることで、初めて自分はどのような立場の者で、どのようなことができるのかということがわかるのではないかと思っています。

第8回TURNミーティングより
2019年5月12日

田中みゆき
（キュレーター／プロデューサー）

TURNフェス5 トーク「IN-Accessibility―世の中の排除から考え実現させるアクセシビリティー」より
2019年8月16日

目が見えていない人が一人いること

（映画『ナイトクルージング』の制作現場で）目が見えていない人が一人いることで、見えている人たちが普段よりも目の前の状況や物事について相手に伝えようとあれこれ努力する傾向が面白いんです。そう考えると、目が見えている人たちは普段、目で状況が見えているだけで共有したつもりになっているということだと思います。

池田晶紀
（写真家）

TURNフェス5 アーティストトークより
2019年8月18日

自分からひらいていく

落語家の笑福亭鶴瓶さんが雑誌の取材で言っていたことですが、「自分から心をひらいていかないと、最短で人の心に近づけないんですよ！ ひらきすぎもよくないんだけどね」と。
これはぼくらも同じでした。訪問先であるリサイクル洗びんセンター*やシューレ大学**の朝倉さんにしても、中にいる人たちがちゃんと外の人たちに対してオープンに協力してくれたことが、とても重要なポイントでした。写真家であるぼくは、扉を叩いて人に会うことが仕事です。そこで実践していることは、鶴瓶さんの言葉のようにできるだけ自分からひらいていくことでした。

*リサイクル洗びんセンター：社会福祉法人きょうされんが運営する障害福祉サービス事業所。昭島市にて、びんの洗浄を中心とした障害者就労支援を行う。
**シューレ大学：新宿区にある、引きこもり、不登校の学生が通い、人や社会のつながりを模索するオルタナティブ大学。

大塚隆史
（バー店主）

二人で協力しあって
やっていける

TURNフェス5 ステージ「The のど自慢 YES!
FUTURE— 性について語ろう—」より
2019年8月17日

（モンキー高野と高島由美子のパフォーマンスを見て）手話と通訳っていうのは僕も何度か見たことがあるけれど、これはもう手話と通訳じゃなくて、二人が一体となった何か。それこそが一つのパフォーマンス。僕は、同性同士のパートナーシップとか、マイノリティのパートナーシップにすごい興味があるんですけど、なんか素晴らしいものを見せてもらったなと。なんかこう一人では生きにくいところを、二人で協力しあってやっていけるっていうのがあって。今日はすごくいいものを見せてもらった気がしました。

森 司
（TURNプロジェクト
ディレクター）

何も喋れなかった

TURNフェス5 トーク「変わることを変えない」
（OTON GLASS＼FabBiotope）より
2019年8月20日

盲ろう者の森篤史さんにあった時。本当に目が見えない耳が聞こえない彼に対面した時に、僕は30分ぐらい何も喋れなかったんですね。

（中略）

初めての方に喋りかけても通じない、筆談もできないっていうそのアプローチの仕方が全くイメージできなかったんです。実際には、手話通訳やデバイスを通じて会話をしていくと、彼に欠落感がないんですね。見えないとか聞こえないとかの欠落感がない、一つのコンプリートした世界観を持っていて。コミュニケーションだけしていると、障害を感じないんですよ。すごく魅力的な体験でした。

小山田徹
（美術家／京都市立芸術大学
美術学部教授）

TURNフェス5 トーク「一人ひとりの自発的な
学びを引き出す多彩なアプローチ」より
2019年8月18日

問題をずらして
何かに変える能力

甘やかすということではなくて、目の前の子の何か本当に良いポイントで見ること、もしくはその人の何かいいところを見ること。その心の姿勢をこちらが持っているか、持っていないかっていうのを、特に子供たちはすぐに読みます。そこのポイントで大人が試されているのは、そこで起きていることの問題をずらして何かに変える能力です。

ジュリア・カセム
（京都工芸繊維大学特命教授）

TURNフェス5 トーク「IN-Accessibility―世の中の排除
から考え実現させるアクセシビリティー」より
2019年8月16日

決まった障害者団体とだけ
接さないで

行政や組織にもっと障害の中のダイバーシティを認めてほしいね。例えば何か「インクルージョン」や「ダイバーシティ」に関わる取り組みをしようとする時に、まずは決まった障害者団体や委員会に行ってしまいがちです。でも世の中や行政は、まだまだ障害の中の多様な側面、若い障害者の世代や個人を見ようとしない傾向があります。
私が日本に来た時は1971年で第3セクターがすごく弱かった。でも今はそうではない。TURNを見ていると、その若さと楽しさにいっぱい溢れている。なので（こんな場が他にもできるように）多様な取り組みを目指している行政や組織にお願いしたいことは、そういう決まった障害者団体とだけ接さないでもっと広い範囲の人々と関わってほしいということです。

牧原依里
（聾の鳥プロダクション代表／映画作家）

聴文化という言葉

第7回TURNミーティングより
2019年2月2日

まず手話は言語です。聴者が使う言語とは違います。それから、ろう者の生活でのいろいろな考え方、習慣や動きなども聴者とは異なります。われわれは目の人というか、目で何事も判断してきたというところがあります。「聴文化」という言葉もわれわれの中では使っているんですが、「聴文化というものはどんな感じですか」と聴者たちに聞いてみると、大変戸惑うようなんです。多様性の中に、実は聴者もいて、彼らもまた多様性の中の一人だと思うんですよね。
東京ろう映画祭では、ろう者がメインですが、聴者と一緒に進めています。その時に聴文化とは一体なんなのかと考えながら、こういったものがあるんだと、われわれとしては気づいて見ているんですよね。

ラブ・エロ・ピース
（アウトサイダー・フォーク・パンク・バンド）

自分の思いと　はなればなれ

TURNフェス5ステージ
「オープニングナイト」より
2019年8月16日

世の中変わりました
ノンステップバスに乗れる
駅にエレベーターが付いた
でもあの人は　お母さんがけがして
山の上の収容ハウスに行っちゃった

友達とはなれ　家族とはなれ
自分の思いとはなればなれ
はなればなれ　はなればなれ　はなればなれ

※歌詞『同級生』の一部
作詞：お邪魔ん裕二／作曲：菅原ニョキ

松田崇弥
（ヘラルボニー代表取締役／
「未来言語」取締役）

わかり合えないという前提

第8回TURNミーティングより
2019年5月12日

僕らは人と人がわかり合える前提に立って、いろいろとコミュニケーションをとるわけですけど、例えばわかり合えると思ってずっとコミュケーションをとっていて、わかり合えなかったと気づいた時点で、わかり合えなかった人同士のコミュニティがなくなってしまいます。100%わかり合えないという前提で向き合えばコミュニティが持続すると思います。

長津結一郎
（九州大学大学院芸術工学
研究院助教）

お互いに
やっていかなきゃいけない

TURNフェス5 レクチャー「『わたしたち』の場所を考えるゼミ『in/ex-clusion』」より
2019年8月17日

状況によって、立場によって、いる場所によって、マイノリティか、マジョリティかって変わるので、「障害のある人たちが元気になればいいんでしょ」みたいなことは通用しないわけですね。いろんな人たちが、マイノリティであり、マジョリティであるので、お互いにエンパワメントされて、お互いに意識が変わるっていうことを、お互いにやっていかなきゃいけないと思います。

佐藤拓道
（たんぽぽの家アートセンターHANA職員）

プログラムが変わっていく

TURNフェス5 トーク
「身体で遊び、表情とオドル」より
2019年8月18日

（ワークショップ参加者の）興味が何に向かいたいかによってプログラムが変わっていく。それでいいんじゃないかと。（参加者が）ただそこにいて、立ち去る人もいる。立ち去ったら立ち去ったでダンスかもしれない、というのが僕たちの捉え方です。銭湯みたいだなとも思いました。必ずしもダンスをやりたいという目的の人が、（ワークショップに）入っているわけではないですよね。

関場理生
（ダイアログ・イン・ザ・ダークアテンド）

自分では知り得ないことを他の方に伝えてもらう

TURNフェス5
サポーターオリエンテーションより
2019年8月2日

大体の視覚障害の方が、色と無縁であることはないと思うんですね。日常に色って溢れていますし、周りの人からの情報もあります。色の知識がまるでなく過ごしている人はいないと思うのと、私は見えているものを言葉にしてもらうというのは、自分にとって有効というか、とても素敵なことなんじゃないかと思っています。自分では知り得ないことを他の方に伝えてもらうということは、とても良いことですよね。

大久保由美
（ダンサー）

タイムライン「8月の誕生日会」より
2019年8月9日

素のリアクション

それが切れて負けても悔しがる様子はなく、勝って喜ぶ様子もなく、勝ったこと、負けたことへのリアクションが微妙だ。しかし、楽しそうである。でも私の素のリアクションも、そんなものかもしれない。予想では彼らの多くは、負けたら子供のように悔しがるのかと思っていた。前回私がこの取組に加えてもらった時は、わざとらしく対戦相手を見つめたし、勝った時は余計に喜んだ様子を見せた。悪いことはしていないのだが、思い返すと少し恥ずかしくなる（笑）。
私は多少なりともユミを演じているのだなぁと認識した。

島影圭佑
（OTON GLASS＼FabBiotope主宰）

TURNフェス5 トーク「これからのインクルーシブデザイン」
（OTON GLASS＼FabBiotope）より
2019年8月17日

多様性の発明

その人自身が持っている多様性とか、個別性をありのまま存在させる道具っていうのを、僕は多様性の発明と言いたい。

瀧口幸恵
（プロジェクトワーカー）

多様な場の美しさ

（ブラジルで交流した障害者支援施設のモンチアズールには）小さい敷地内に文化施設と学童保育施設が併設されていて、とても自然にいろんな人が関わり合っている、日常的に居合わせている。このなんかごちゃっとしているんですけど、その不思議と心地よい光景は、目に焼き付いています。日本だと壁で隔てられた別々の施設だったりするので、生活の中でも出会う人と出会わない人がより生まれやすいと思いますが、ここでは全く違いました。雑多で非効率で愛おしい。そんな多様な場の美しさの原体験をさせていただいた気がします。

TURNフェス5 トーク
「地球上のいろいろなところにあるTURN」より
2019年8月20日

ルース・マリエット・トゥルエバ
（アーティスト）

心を通わせあえる関係

私たちがグループ内で心を通わせあえる関係を築き始めたことで、伝統工芸は、初めて生き生きとしたものとなった。
おそらくこのことが、これらの伝統が、ある世代から別の世代へと伝わってきた理由なのだろう。そうやって、伝統工芸は生き残る。

TURN in HAVANA 日報より
2019年3月14日

中浜崇之
（NPO法人Ubdobe理事／
特別養護老人ホームグラン
アークみづほ施設長）

スポットライトの
当て方を変える

TURNフェス5 トーク
「未来の人たち―2029年の日本の教育と福祉」より
2019年8月20日

すごいなと思ったのが、認知症の方々もスポットライトの当て方を変えると、今までは施設にいる普通のおじいちゃんだったのが、実はそこの地域のことをむちゃくちゃよく知っている人だったりします。勝山のおじいちゃんは、「勝山だと男性がすごい出刃包丁を必ず一人一本持っていて、それでおっきな魚とか、獣を昔は捌（さば）いて出すっていうのが男の仕事だったんだよ」って言うと、何かその話をしている時って、ホントにその人だし、この人たちがそういった文化を継承していったから、今のこの地域があるんですよね。

藤岡聡子
（福祉環境設計士）

福祉の再構築

第9回TURNミーティングより
2019年11月17日

福祉の再構築って何かなって考えた時に、そこにいる人たちの人の流れを変えていくことかなって自分の中で腑に落ちたことがありました。

伊勢克也
（アーティスト／女子美術大学短期大学部教授）

タイムライン
「〈この1年で見たこと考えたこと〉」より
2019年6月15日

内部に多様性を持っている

人間個人の中にもさまざまな様態を持っている。アーティストとしての自分、日本人としての自分、人間としての自分、父親としての自分…人間個人のアイデンティティも、内部に多様性を持っていることを認めないとね。障害を持つ人や、社会的マイノリティと言われる世界にいる人は、同時に社会内の人であって、女性／男性であって、人間であって、どこかの国に住む人であって…なんかそんなこともね、強く思ったね。そして、さまざまな多様性を認める社会でなければ、アートなんか存在できない。僕らは日本の中でマイノリティである。

（中略）

TURNが交流している全ての人たちと変わらないのではないかな。

著者プロフィール

赤荻徹（あかおぎ・てつ）
アトリエ・エー代表｜ダウン症や自閉症の子供たちを中心とした絵の教室や、サッカーチーム「エイブルFC」を主宰。2017年より、TURN参加アーティストがアトリエ・エーへ通い交流を行っている。

安部良（あべ・りょう）
建築家｜「食とアート」で人々をつなぐ出会いの場『島キッチン』をはじめ、福祉・子育て・観光・移住など領域を超えたプロジェクトを手がける。地域活性の基盤づくりと、コミュニティの見える場を設計している。

石川絵理（いしかわ・えり）
NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク事務局長｜当事者が主体となって観劇支援を推進する活動を展開しており、TURNではアクセシビリティに関するコーディネートを行う。TURNフェス5* では、盲者の関場理生とともにツアーを企画した。

伊勢克也（いせ・かつや）
アーティスト/女子美術大学短期大学部教授｜自然/人工物/メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形作る形態をテーマに作品を制作。2017年からTURNに参加し、高齢者在宅サービスセンター「桃三ふれあいの家」で交流を行っている。

池田晶紀（いけだ・まさのり）
写真家｜2015年よりTURN交流プログラム*の一環で、「リサイクル洗びんセンター」に通い続ける。2019年には「シューレ大学」の学生とともに同センターへ訪問し、撮影を通して交流する。そこでドキュメントした写真をもとにTURNフェス5* で展示とトークを行った。

板橋区立小茂根福祉園（いたばしくりつこもねふくしえん）
障害者通所施設｜生活介護サービスと就労継続支援B型サービスを行う通所施設。2015年よりTURN交流プログラム、2017年からはTURN LANDに参加し、さまざまなアーティストとプロジェクトを展開している。

大久保由美（おおくぼ・ゆみ）
ダンサー｜2018年のTURNフェス4*で大久保がアーティストの伊勢克也による《共生するアトリエ》でモデルを務める。2019年より、ラテン音楽バンド「ラ・マーニャ（La Maña）」とともに障害者支援施設「上町工房」へ通い、TURN交流プログラムを行っている。

大塚隆史（おおつか・たかし）
バー店主｜TURNフェス5でマダムボンジュール・ジャンジが企画した「The のど自慢 YES! FUTURE ― 性について語ろう ―」にコメンテーターとして参加。新宿三丁目のバーで店主を務めながら、絵を描いたり、オブジェをつくったりするなどの活動を行っている。

梶谷真司（かじたに・しんじ）
東京大学大学院総合文化研究科教授｜参加者がひとつのテーマで自由に語る「哲学対話」の実践者。学校教育、地域コミュニティなどで、フラットな関係性に重視しながら「共に考える場」をつくる活動を行っている。

川瀬一絵（かわせ・かずえ）
写真家｜テーマを定めずに衝動的に撮り、それらを編集しながら衝動の訳を探るような作品を制作。2015年からTURNに参加し、池田晶紀とともに「リサイクル洗びんセンター」と「グループホーム フラワー」で交流を行う。

小山田徹（こやまだ・とおる）
美術家/京都市立芸術大学美術学部教授｜1998年まで、パフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。さまざまな共有空間をつくりながら、近年、焚き火を核とした場の創生の試みとして「ちび火」「Weekend café」などを展開している。

佐藤拓道（さとう・ひろみち）
たんぽぽの家アートセンターHANA職員｜全ての人がアートを通じて自由に自分を表現したり、互いの感性を交感することができるコミュニティ・アートセンターの運営に携わる。また、演劇やダンスを活用した身体のワークショップをコーディネート。

塩瀬隆之（しおせ・たかゆき）
京都大学総合博物館准教授｜博物館や学校におけるインクルーシブデザインの研究に従事している。

島影圭佑（しまかげ・けいすけ）
OTON GLASS/FabBiotope 主宰｜父の失読症をきっかけに、文字を代わりに読み上げてくれるメガネ「OTON GLASS」の開発を始める。視覚障害者をはじめ、一人ひとりが描く生活環境や個々のこだわりに着目しながら、それを可能にする発明や環境づくりに取り組む。TURNフェス5*では、「ものづくり」の可能性を探求する展示と、全6回の公開トークを企画した。

ジュリア・カセム
京都工芸繊維大学特命教授｜インクルーシブデザインの観点からのスキルと知識を共有することを目的としたワークショップとプロジェクトや展覧会を企画している。2014年、京都工芸繊維大学でD-Labの設立に携わり、国内外で多くの学際的なデザインプロジェクトを展開している。

白鳥建二（しらとり・けんじ）
全盲の美術鑑賞者｜TURNフェス5*にて、盲者と晴眼者が作品の前で語り合うツアーを実施。さまざまな美術鑑賞のあり方を探求している。

新澤克憲（しんざわ・かつのり）
ハーモニー施設長｜心の病を持ちながら暮らしている人が思い思いに過ごせる施設として「ハーモニー」を運営。2015年よりTURNに参加。2017年よりTURN LANDをスタートし、アーティストの深澤孝史やライラ・カセムらと企画を展開。

関場理生（せきば・りお）
ダイアログ・イン・ザ・ダーク アテンド｜盲者であり、視覚以外の感覚との出会いを提供する活動に携わる。TURNフェス5*にて、ろう者の石川絵理とともにツアーを企画した。

高橋若余（たかはし・わかよ）
TURNフェス5サポーター｜TURNフェス5*にサポーターとして参加。

髙橋梨佳（たかはし・りか）
せんだいメディアテーク職員｜昨年のTURNフェス4*で「妹のわりきれなさツアー」を実施。自閉症のある姉をもつ。

瀧口幸恵（たきぐち・さちえ）
プロジェクトワーカー｜2016年、TURN in BRAZILにワークショップファシリテーターとして参加。墨田区を拠点にプロジェクトの企画制作や立ち上げを行っている。

田中みゆき（たなか・みゆき）
キュレーター/プロデューサー｜障害を「世界を新しく捉え直す視点」とし、カテゴリーに捉われないアプローチを展開する。

富塚絵美（とみづか・えみ）
アーティスト｜一般社団法人谷中のおかってを設立し、ディレクターとしてアートプロジェクトを企画運営している。TURNに2015年から参加し、TURNフェス5*では盲ろう者との対話を通して、「暇つぶし」をテーマに空間を構成。

長津結一郎（ながつ・ゆういちろう）
九州大学大学院芸術工学研究院助教｜アーツ・マネジメント、文化政策学、芸術社会学などをベースとし、障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行う。

中浜崇之（なかはま・たかゆき）
NPO法人Ubdobe理事/特別養護老人ホームグランアークみづほ 施設長｜介護福祉士。医療福祉エンターテイメントを通じてあらゆる人々の積極的な社会参加の実現を目指して活動している。

布下翔碁（ぬのした・しょうご）
工芸作家｜東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程工芸研究領域（陶芸）在籍。2019年、アルゼンチン北部で展開したTURN in TUCUMAN, BIENALSUR*に参加。

藤岡聡子（ふじおか・さとこ）
福祉環境設計士｜軽井沢町で在宅医療拠点を“ケアの文化拠点”と名付け、人の流れが生まれる、生き物のような場をつくろうと試みている。2019年に訪問看護ステーション（のようなもの）を立ち上げた。2020年には診療所と大きな台所があるところ「ほっちのロッヂ」を開業する。

牧原依里（まきはら・えり）
聾の鳥プロダクション代表/映画作家｜ろう者。2017年、東京国際ろう映画祭を立ち上げる。TURNフェス5*では、ろうの学生がつくる映画ワークショップを企画。

マチーデフ
ラッパー｜CMソングの作詞やテレビ番組のラップ監修を行うなど、ラップクリエイターとしても活動中。2019年よりTURNに参加し、心身障害者福祉ホーム「さくらんぼ」と交流を行う。

松田崇弥（まつだ・たかや）
ヘラルボニー代表取締役/「未来言語」取締役｜福祉実験ユニット「ヘラルボニー」や、100年先のコミュニケーションを考える「未来言語」などの活動に取り組む。知的障害のある人たちのクリエイティビティをブランディングすることで、社会への新しい価値の提案を目指している。

松本力（まつもと・ちから）
アーティスト｜絵かき、映像・アニメーション作家。TURNには2018年から参加し、聴覚障害児を対象とした福祉型障害児入所施設「金町学園」にて交流を行う。

百田牧人（ももた・まきと）
会社員｜TURNフェス5*で実施されたトークにゲストとして参加。視覚障害を持つ息子と暮らす。

矢内純子（やない・すみこ）
TURNフェス5サポーター｜TURNフェス5*にサポーターとして参加。

ラブ・エロ・ピース
アウトサイダー・フォーク・パンク・バンド｜差別の心を問うバンド。ハーモニー施設長の新澤克憲がメンバーとして参加。

ルース・マリエット・トゥルエバ
アーティスト｜キューバ出身。2019年、キューバで展開したTURN in HAVANA*に参加。手工芸や伝統的な技法を通し、記憶をテーマに制作している。

ロバート キャンベル
日本文学研究者/国文学研究資料館長｜江戸・明治時代の文学、特に江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。

日比野克彦（ひびの・かつひこ）
TURN監修者/アーティスト｜2015年より東京で始動したTURNの監修を務める。東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授、岐阜県美術館館長、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長。

森 司（もり・つかさ）
TURNプロジェクトディレクター｜アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業を手がける。

畑まりあ（はた・まりあ）
アーツカウンシル東京職員｜地域住民と協働するアートプロジェクトや文化政策に関心を持ち、2016年よりTURNに携わる。

ライラ・カセム
TURNプロジェクトデザイナー｜障害福祉の現場でデザイナーとしての専門性を活かし、施設のメンバーと支援スタッフとともにアート作品を作り上げ、その作品をもとにした持続可能なデザイン商品の制作・開発やワークショップの運営・企画を国内外で取り組んでいる。

*詳細は、「TURNとは」を参照。

本書について

2016年に第一号を発行してから、今年で４冊目となる本書『TURN NOTE』。

どの年においても変わらず大切にした制作の指針は、TURNに関わった人たちから生まれた言葉を、あえてまとめ直さない編集プロセスをとることです。さまざまなシーンにおける発見や葛藤、予感、思いと、発言者の「その人らしさ」や空間の特徴が感じ取れる言葉を、その場のリアルな瞬間とともに取り込むことを大切にしています。

その結果、これまでのTURN NOTE同様に、TURNの活動の広がりや、ときに社会と呼応しながら変化していった様子を感じとることができるものになりました。

本書に集められたさまざまな視点から、2019年のTURNを感じていただくとともに、多様性のある社会と創造性について考える一助となれば幸いです。

TURNとは

SOCIALLY INCLUSIVE ART PRACTICE PROJECT

T U R N

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。
これまでに約70名のアーティスト、約60の施設や団体が参加しています。年間を通して展開している多彩なプログラムをもとに、国内外で広くその意義を発信していきます。

監修：日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授）｜プロジェクトディレクター：森 司（アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長）｜主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学

TURN交流プログラム

アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたアーティストによるリサーチも行います。

TURN LAND

福祉施設や団体が、アーティストとともに参加型のプログラムを企画します。場所のもつ従来の機能に、市民が集まることができる地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、TURNを日常的に実践する場をつくります。

TURNフェス

TURN交流プログラムやTURN LANDを実施する多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなど様々なコンテンツを通してTURNを体感できます。

TURNミーティング

TURNの可能性を共有し、語り、考えあう場。参加アーティストや交流先などの関係者とともに、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、様々な視点からTURNを考察します。

海外展開

国内外の文化芸術機関等と連携し、海外でもTURNを実施。参加アーティストが各国で伝統的な技術や所作を携えて福祉施設やコミュニティ等と交流し、その経験をもとに展示やワークショップまたはパフォーマンスを展開します。
［これまでの展開：TURN in HAVANA、TURN in TUCUMAN, BIENALSUR など］

TURN NOTE
「TURN」とともにあるときの言葉 2019

令和2年3月19日

監修：森 司（アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター）
編集：田村悠貴（特定非営利活動法人Art's Embrace）、
畑まりあ（アーツカウンシル東京）
編集協力：特定非営利活動法人Art's Embrace
［天羽絵莉子、岩中可南子、清水康宏、玉置真、東濃匠十、
東濃誠、村方光沙子、本島かおり、山口麻里菜、ライラ・カセム］、
アーツカウンシル東京［荒木由香里］
デザイン：阿部原己
翻訳：オフィス宮崎
印刷：山田写真製版所

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
Tel：03-6256-8435／Fax：03-6256-8829
Email：info@turn-project.com
URL：www.artscouncil-tokyo. jp

TURN公式ウェブサイト：https://turn-project.com

©2020 Arts Council Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

東京都　ARTS COUNCIL TOKYO　Art's Embrace　TOKYO GEIDAI

文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo Tokyo FESTIVAL

Tokyo Tokyo FESTIVAL とは…

オリンピック・パラリンピックが開催される2020年の東京を文化の面から
盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市
東京の魅力を伝える取組です。